Japanese Association of Educational Psychology

The Annual Report of Educational Psychology in Japan
1999, Vol. 38, 3-7

準備委員会企画シンポジウム1

早期療育の「これまで」と「これから」を考える

企画者	伊藤則博	(北海道教育大学旭川校)
	加藤正仁	(東京うめだ・あけぼの学園)
司会者	伊藤則博	(北海道教育大学旭川校)
話題提供者	佐々木浩治	(北海道足寄町母子通園センター・あゆみ園)
	阿部哲美	(北海道医療大学看護福祉学部)
	加藤正仁	(東京うめだ・あけぼの学園)
指定討論者	大場公孝	(おしまコロニー・地域療育センター)
	蔭山英順	(名古屋大学教育学部)

はじめに

伊藤　則博

早期療育は新しい分野なので，いろいろと課題も多い。最近は日本各地で，就学前の心身障害あるいはそれに類する者たちへの取り組みが始まっているが，制度の整備システムの構成，療育目標の設定や内容等について，研究はまだまだ不足である。一度総括してから今後の行く末を考えたいと思うので，この時間を情報交換も含めた有意義なものにしたい。それに相応しい3人のシンポジストを紹介します。

佐々木浩治さんは，北海道は十勝の足寄という小さな町を拠点に，そこに早期療育という信念の火を点し地域のシステム化を計った方です。7年間にわたる活動を中心に話して頂きます。阿部哲美先生は，何も無かったところに家庭児童相談室を起こし，20年間やってこられた方です。今は全国300の通園事業施設連合会組織の会長を務めておられるので，全国的な立場から提言を頂きます。3人目の加藤正仁先生は，東京のうめだ・あけぼの学園園長であります。全国の300カ所の通園施設の代表者でもあります。先生には最近の制度の動きからお話いただきたい。

次に，指定討論者の大場公孝先生は精神科の医師ですが，小児療育から児童，青年，高齢障害者の入所施設等々，20数ヵ所の施設を擁するおしまコロニーの代表者です。30年も続けてきた地域実践経験から，3人のシンポジストの提言に注文をつけて頂きます。また名古屋大学の蔭山先生は，自閉症の研究者として皆様よくご存知かと思いますが，最近は乳幼児健診後の発達障害児と親の支援，名古屋市の生涯教育スーパーヴァイザー等をしておられます。障害児も含め，教育全体を見渡した広い視野から，心身障害児への早期対応の問題点を指摘して頂けるものと思います。

あゆみ園の現況について

佐々木浩治

1．**概況**：「あゆみ園」は北海道早期療育整備事業の母子支援センターですが，当初は職員が2人だけ，「一体どんなことをするんだろう」という模索の段階から園を運営してきました。子どもには「年齢に相応しい経験をさせてから社会に出そう」，親には「子どもと向き合い，共に楽しく人生を送るような援助を」，が最近到達した心境です。職員の1人が子どもを，もう1人が親を担当します。初めの頃は「少しでも子どもを変えてやろう」との意識が強かったのですが，今は子どもの現状を踏まえた上での自発的変化を重視しています。障害の原因や現在実施している指導法などについて親にはきちんと伝え，子ども達には共感できる力とか，人と一緒に楽しむことができる力を付けて欲しいものと，療育を進めています。

2．**関係機関とのつながり**：小さな町なので，あゆみ園にいても小学校や中学校の動きはよく分かります。卒園後も子ども達の様子を知りたいので，教育現場の方々にもお手伝いを頂いてます。学校の先生方と相互に交流し，心配事があればその場で話し合えるようにもなったし，学習障害などについての相談等も出来るような態勢になりました。不登校や学力不振の子どもも含め，上は中学1年生から下は幼稚園児まで，機関同士の連携で，幅広い相談に対応できる形が徐々に拡がってきました。

3．**ふれあい親子視察旅行**：5年前，20人程のメンバーで始めたあゆみ園OB会「ふれあいの会」も今は48家族，行事の度に70～80人も集まるまでになりました。多くの選択肢から子どもの進路を選択できるようにと，あちこちの入所施設を見学するのがメイン行事です。親からの要望もあって今では「家族旅行」の形態になりました。

4．**ふれあいゴミ袋の販売**：足寄町で生まれた子ども達が，もし在宅を希望した場合，「作業所のような施設があれば嬉しいね」ということで，ゴミ袋を売って作業所づくりの資金を集めています。当初は「あゆみ園」出身の親たちが中心でしたが，最近は園の父母達の参加が増えてきました。

5．**まとめ**：「あゆみ園」が出来た時，「あそこは馬鹿が行くところだ」という噂が町中にありました。だからこ

NII-Electronic Library Service